

平成18年(昭和31年)3月7日(火)

東海の古代

第70号 編集・発行 古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川1-729

メール frttokai@zm.commufa.jp

電話/FAX(カラー可) 052(936)5012

郵便振替 00870-5-30752

講演会開かる

新説続々

既報のように、2月18日、大阪にて古田先生の講演会が開かれました。いよいよお元気で興味深いお話ばかりでした。いずれ講演録も出ると思います。

新しい見解も数々出されました。

白村江の敗戦後、唐軍は倭国を占領し、長期に駐留した。駐留軍がその果実を簡単に手放すはずがない。戦後日本を見よ。未だにアメリカは駐留し続けているのではないか。これは以前からの主張です。

唐の駐留軍は、帰国させた筑紫君薩夜麻に傀儡政権を作らせた。薩夜麻が用済みになったか死亡したか、701年をもって九州王朝から大和王朝に政権を移譲させた。いわば禅譲である。九州年号の大化(二中暦)から、大宝へ間をおかず続いているのもその証拠である、とされます。

当初、これを聞いて直ちに以下の史料が頭に浮かび、疑問を持ちました。

初め唐にいたるとき、人あり、来たり問いて曰く、「何れのところの使人ぞ」。答えて曰く、「日本国の使」。わが使、反問して曰く、「此はこれ何州の界ぞ」。答えて曰く、「是は大周、楚州、塩城県の界なり」。さらに問う、「先にはこれ大唐、今は大周と称す。国号、何によりてか称を改めたる」。答えて曰く、「永淳二年、天皇大帝(高宗)、崩じて皇太后(武后)位にのぼり、称を聖神皇帝、国を大周と号せり」。問答ほほおわり、唐人、わが使にいて曰く、「しばしば聞く、海東

に大倭国あり、これを君子国という。人民豊楽にして、礼儀敦くおこなわる、と。いま、使人をみるに、儀容はなはだ淨し。あに信ならずや」。語おわりて去る。

[続日本紀慶雲元年(七〇四)秋七月条]

八世紀最初の遣唐使が、唐から周への国号変更を知らなかったというエピソードとして、よく引用されます。

則天武后によって周へと国号が変更されたのは、六九〇年、粟田真人が中国へ渡ったのは七〇二年です。その間十年以上。占領された国の使いが、占領している国の国号変更を知らない、という事態はありえるのでしょうか。占領軍が母国の国号変更も知らずに駐留を続けるという事態はありえるのでしょうか。

しかしこの記事をよく読むと、変更自体を知らなかったのではなく、変更の理由を問いただしているだけです。主眼は日本の使節が現地の地方役人にも高い評価を受けたことを報告するにあります。

考えてみれば当時の東アジアにおいて、世界に冠たる大唐帝国の国号変更を知らずにすむ国家のあるほうが不思議です。また他方、その血なまぐさい変更の内情を、占領軍が正直にもらすはずもありません。七世紀後半の九州王朝の動向につき、いよいよ議論が白熱してきました。

4月例会に参加を

日程：4月9日(日)午後1時~4時半

場所：名古屋市公会堂第3集会室(2階)

名古屋市昭和区鶴舞1丁目1-3

地下鉄鶴舞線「鶴舞」下車4番出口徒歩2分

JR中央本線「鶴舞」下車公園出口徒歩2分

参加費：500円(維持会員は無料)

今後の予定

5月例会：5月14日(日)

6月例会：未定

例会はなるべく毎月第2日曜日にしたいのですが、会場の都合等によりしばしば変則的になります。日程をよく確認しお出かけください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。

なお5月はまた名古屋市市政資料館(第2集会室)を使用します。

続・呪符の証言

前回の「呪符の証言」で一部私の思い違いがありました。ヤマタノオロチの名の由来の件ですが、私はマタとは二つに分岐するものの付け根部分を指すものと考え、頭が八つなら、マタは七つとしてしまいました。しかし二股大根、三叉路など、数えるときは枝のほうを数える習慣になっています。したがってヤマタノオロチは頭が八つあるのが自然になります。しかし古事記の記述は以下のような状況になっています。

「我が女は、本より八稚女ありしを、この高志の八俣の大蛇…身一つに八頭八尾あり…その長は谿八谷峽八尾に度りて…」…「汝等は八盪折の酒…垣に八門…門毎に八棧敷…」

要するに数の多さを表現し語調を整えるために八の文字を多用しているにすぎません。ということはそう厳密に考えなくても、木簡の九頭一尾の大蛇はやはりヤマタノオロチと同一視してよいのではないのでしょうか。

平城京の地下から届いたのは偽メールではありません。某議員とは異なり、裏づけ調査も進捗しています。実は瀬戸市の林研心さんから、きわめて重要な指摘を受けました。筑後国風土記にも「南山」があるというのです。知ってはいましたが、それは豊前にあるのでは?ところが豊前と南山は別の場所だ。筑後国風土記に、ただ南山とある以上、筑後の中の南山と考えるべきだということです。

俄而官軍動發 欲襲之間 知勢不勝 獨自遁于
豊前國上膳縣 終于南山峻嶺之曲 於是 官軍
追尋失蹤 士怒未泄 擊折石人之手 打墮石馬
之頭 古老傳云 上妻縣 多有篤疾 蓋由茲歟
(筑後國風土記逸文)

古田先生もたびたび引用した一節ですが、確か

に二つの「于」字で、豊前國上膳縣と南山は明確に分けられており、筑後国風土記内で取り上げられている以上、無冠の南山は筑後国の中で著名な場所であるべきで、すなわち高良山です。

この着想であらためて読み直せば、磐井は近畿軍を加勢と思い、歓迎のために豊前に出迎えたが襲撃を受けた。高良山近くまで逃げたが、息絶えた。磐井の行方を見失った追跡軍はさらに少し南下、磐井の墓の石人石馬を壊して鬱憤をほらした、と実に自然な状況説明になります。日本書紀の「大將軍物部大連鹿火、親ら賊の帥磐井と、筑紫の御井郡に交戦ふ。旗鼓相望み、埃塵相接げり。機を両つの陣の間に定めて、万死つる地を避けず、遂に磐井を斬りて、果して疆場を定む。」という記述とも容易につながります。

かくして平城京木簡、古事記序文、筑後国風土記と登場する「南山」はいずれも同一地点、高良山を指すという結論を得ました。私の論理のいかだは又も同じ孤島の同じ浜辺に引き寄せられたようです。ただし「南山」という言葉自体はそのある種あいまいな表現から、高良山一山を指すというよりは高良山を含む山塊、耳納山地を指していると考えたほうがよいかもしれない、と思いつつあります。

もともと、古田先生の現在の説によれば、「磐井の乱」そのものがなかった。磐井の墓の石人石馬をこわしたのは唐軍だということになります。(「古代に真実を求めて」第八集参照)

磐井の息子、葛子は生きていたのだから、磐井の墓は直されたはずだ。最終的に壊されたのはもっと後だといわれます。

天武四年(675)十月条をご覧ください。
筑紫より唐人三十口を貢れり。則ち遠江國に遣して安置らしむ。

日本書紀の唐軍関係の記事はこれが最後です。唐の駐留軍が健在なら、ありえない事件でしょう。私にはヤマタノオロチ(九頭一尾の大蛇)が喰い残した唐鬼たちの、かすかな後ろ姿に見えるのです。